

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

五木村での「佐々木高明の見た焼畑」展：  
フォーラム型展示の可能性を探る<基幹研究：  
データベース「焼畑の世界：  
佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開  
>

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2021-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009683">https://doi.org/10.15021/00009683</a>

# 五木村での「佐々木高明の見た焼畑」展

## —フォーラム型展示の可能性を探る

文・写真 池谷 和信

### コロナ禍での新たな挑戦

私はこれまで民博において、新着展示・企画展示・特別展示という、規模の小さいものから大きなものまで、さまざまな展示を行った経験がある。各タイトルを紹介すると、新着展示「ビーズ—美しさに秘められた南部アフリカの知恵」(1998年8月-1999年2月)、企画展示「アマゾンの生き物文化」(2013年5月-8月)、特別展示「ビーズつなぐ・かざる・みせる」(2017年3月-6月)である。いずれも自らの研究成果を展示場の空間をとおして紹介するものであった。なかでもビーズ展については、民博での展示の後、国立科学博物館(以下、科博)と協力し、2019年春、上野公園に位置する科博にて、民博と科博との初めての共催展示として「ビーズ—自然をつなぐ、世界をつなぐ」を開催した。これには、文理融合からの挑戦的な展示として20万人以上の来館者があった。しかしながら、私は何かもの足りなさを感じていた。

今回の「佐々木高明の見た焼畑」展(2020年10月-12月)は、熊本県球磨郡五木村と民博との共催展示であり、人口千人余りの山村・五木村で開催された小さな展示である。多くの入館者数は、期待できないかもしれず、大阪から数時間も費やす場所での展示であり、民博内でも関心を持つ人は多くはなかった。しかしながら、五木村は故佐々木高明(第2代民博館長)の研究の原点になった村であり、民博内外の関係者の展示への思いが結集しているという点では、科博でのビーズ展にも負けない熱量はあった。同時に、これまでの館の展示とは異なり、私自らが行わなければならなかった。民博での展示は、準備の段階からサポート体制があり、経費の点でもいかに恵まれているか思い知らされた。

さて、本展示は、佐々木高明が撮影した写真を、私が数年前前からこのプロジェクトをとおして整理・公開したデータベースがもとになっている(池谷 2020)。彼は、1958-1960年の間、熊本県五木村に出かけて撮影を行った。国内では最後に残る焼畑の調査・研究のためである。当時、五木村には佐藤光昭さんという役場職員がいた。彼は、「五木村の焼畑慣行」という論文を書いていたほど研究熱心な人であった。佐々木高明は、佐藤さんの助けを借りて村内の梶原集落での焼畑調査を行ったのである。ここでは、五木村と民博との共催展示がどのように生まれたのか、その過程を紹介する。同時に、小さな村での展示を開催する意義について考え

てみたい。

### どのように展示が生まれたか

今回の展示内容は、村の博物館「ヒストリアテラス五木谷」の関係者との話し合いをとおして生まれたものである。話し合いは、コロナ禍のためにオンラインで行われた。8-9月にかけて毎回1-2時間、およそ10回近くなされた。こちらで、まず、展示の構成についてのたたき台を示す。そして第1部「佐々木高明の歩いた道」、第2部「佐々木高明の見た五木村」、第3部「五木村から日本へ、そして世界へ」、第4部「五木村の焼畑の現代的な意味」の全4部から構成することとなった。

展示では、まず、佐々木高明が撮影した村の暮らしを紹介することから始めた。展示は、当時の写真があまり多くはないという村民の声を受けて、60年前にお世話になった方々へのお礼というコンセプトのもとで構成した。私たちは、佐々木の著書(佐々木 1972)には掲載されていない、当時の木材運搬の様子、村での水田の景観、牛飼育の状況などの写真を選択した。これによって当時、焼畑は村のなりわいの一つであることが示された。

つぎは、展示の第2部にある村の焼畑作業の様子である。集落から離れた小屋(サイゴヤ)での暮らしをとおして畑の作物や作業の様子なども紹介した。佐々木高明は、当時の道具を撮影していた。ナタや鎌などである。とくに樹木に登っての枝切りの作業は、世界的にみてもユニークである。切られた枝木が飛んでいる瞬間を撮った写真をみていると、いかに鋭く切れ味のよい道具が使用されていたかということも理解できる。

皆で話し合いをしている最中、この第2部のなかに新たなコーナーを設けようということとなった。というのは、村の関係者が佐々木高明の写真に触発されて古老に当時の様子の聞き取りをして、当時使用されていたものや使い方など、新たな情報が集まってきたからだ。とりわけ、木から木に移動するキワタシの際の道具をつくることのできる人がまだいたことは注目される。おそらく村で最後の伝承者であるかもしれない。

展示の最後は、佐々木高明の写真をきっかけに研究が進み、新たにわかったことを示した。まず、五木村で稲作が導入されたのは江戸時代以降である。戦後、ダム建設の工事が行われたこともあり、村で縄文時代の遺跡が数多く発見されてい



五木村での展示の様子（2020年、五木村）。

る。そして、数は多くはないが、弥生時代の遺跡もあったので、その土器などを展示した。まさに土器を使い農耕を行った「山の弥生人」の存在を示すものである。弥生時代に焼畑があったかどうかはわからないが、畑作文化の存在はあったにちがいない。さらには、江戸時代の畑作文書から当時の焼畑地の地名がわかった。その結果、地名から焼畑の範囲を示すことができた。焼畑が標高1,000mを越える山地にまで行われていたことは、当時の山への依存度の高さを示すことになった。

## 小さい村からの大きなメッセージ

五木村の展示には、冒頭で述べた民博でのこれまでの展示と比べて、どのような特性があるだろうか。その一つは、ミュージアムと展示される対象との物理的距離の近さである。このため今回は、対象となる地域住民の声を聞きながら展示をつくりあげることができた。現地の家屋のなかで、焼畑に使用していた道具が新たにみつかることもあり、それを展示場に追加して並べることもできた。

二つ目は、展示資料に関する間違いを村の人が指摘してくれた点である。この写真の子供たちはうちの村にはいないなど、より正しい情報を知ることになった。そして写真は村人の記憶に刺激を与えて、新たな事実を明るみに出してくれた。現在、村では焼畑を行っていない。しかしながら、それに関わる知識が現在でも維持されていることがわかった。今回の展示をきっかけとして村の関係者も、消えてしまう知識に危機感を感じて記録することの重要性を訴えていた。

そしてその危機感から、展示場において村からのメッセージを明記した。それは、以下のようなくだりである。「私たちは国をつくることで文明を発展させてきた。同時に、それは国の中心と周辺を生むことになった。焼畑は、国の周縁で行われてきた原始的農法である。水田稲作に比べて劣るものではないか。同時に、低地や国家の中心から周縁がみられることが多かった。辺境はもともと孤立していたわけではない。平野や盆地との経済的なつながりを持っていた。持続可能な資源の利用など、国家の周縁に暮らすことからみえる日本や世界のあり方があるのではないだろうか。」

## 池谷 和信（いけや かずのぶ）

国立民族学博物館人類文明誌研究部教授。専門は人類学・地理学。おもな単著に『山菜採りの社会誌—資源利用とテリトリー』（東北大学出版会 2003年）、共編著に『山と森の環境史』（日本列島の三万五千年一人と自然の環境史）（文一総合出版 2011年）など。

## フォーラム型展示の新たな可能性

最近、村では、2020年7月の球磨川の中流や人吉盆地における水害によってその支流の川辺川ダム建設を促進する動きが活発になってきている。一方、今回の展示は、村で2000年以上つづいた可能性のある焼畑に焦点を当てることで、山の資源利用のあり方を考える試みであった。現在、村では植林した森の伐採の時期にきており、その後何を植えたらいのかが論議になっている。現在は、かつて広く植林されたスギ、ヒノキの価値は高くはない。経済的価値のみならず災害を防ぐための保水力の視点からも樹種の評価・選定が重要になることであろう。

また、今回の展示をとおして火入れという行為に対する人類史的意味を考えさせられた。人類は、180万年前に火を使い始めて料理が誕生したといわれる。その後、火入れによって植物をさらに芽吹かせ、そこに集まる動物たちを狩猟してきた。焼畑は用語からすると農法の一つにみえるかもしれない。しかし、仕組みからみると狩猟や採集の方が近いと考えることもできる。焼畑とは、耕地として使われなくなった後は山菜やタケノコが採集できるなど生態系が改変され、そして再び森にもどった場所に火入れをするという活動である。それは、植生の改変と再生によって有効な森をつくる循環型のなりわいである。

以上のように今回の展示では、佐々木高明の撮影した写真をとおして60年前の村の姿を紹介しただけでなく、その過程において村人と協働して展示をつくりあげた点が特徴になっている。これがこれまで私が経験してきた展示との大きな違いである。展示では、しばしば来場者数とその成功の目安とされる。しかしながら展示にとって必要であり、最も重要なことは、対象に寄り添う気持ちである。今後も、今回の展示から得たさまざまな経験や知見（ミュージアムと村人との距離、村人が参加できる展示、小さな村から発信する大きなメッセージなど）をとおして、本プロジェクトのなかで「フォーラム型展示」の新たな可能性を私は探っていきたいと思っている。

## 引用文献

池谷和信 2020「食と農の未来—佐々木高明の見た最後の焼き畑」『月刊みんぱく』44(7): 6-7。  
佐々木高明 1972『日本の焼畑—その地域的比較研究』東京：古今書院。